

平成25年度 歴史移動展

標茶に生きる

～開拓道具と当時の生活～

明治中頃から昭和20年代にかけて、多くの人々が本町に入植しました。しかし、本町での開拓は寒冷地の上に、入植地の多くが原生林に覆われていたため、困難を極めました。人々は馬とともに様々な道具を使い、開拓に挑みました。



今回の移動展示では、開拓時代の証言とともに開拓作業に使われた道具を展示しています。本展示は3月までの開催となっています。皆様のご来場をお待ちしています。

3月の展示会場

・各会場初日の展示は午後からとなります。見学は無料です。

3月 3日(月)～ 7日(金)	茶安別農村環境改善センター
10日(月)～14日(金)	阿歴内公民館
17日(月)～24日(月)	磯分内酪農センター
25日(火)～28日(金)	塘路住民センター

(開催日程変更となっています。)



大川のほとり

郷土館だより (第61号)
☎487-2332

開館時間
午前9時30分～午後4時30分

郷土館より 上
一筆啓

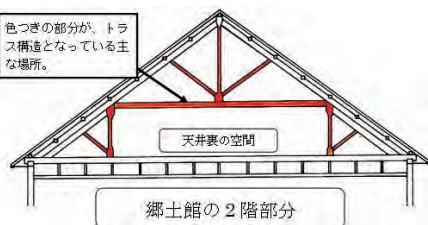
今年度は雪が少なく、日中も気温がプラスになるほど、暖かい冬でした。

3月の初めにはアオサギが子育てをきに塘路湖にやってきます。春ですね。(辻)



官署の天井裏に使われている二重梁。ウロのある原木を、手作業で削った跡が残る。

色つきの部分が、トラス構造となっている主な場所。



釧路集治監官署(現郷土館)の天井裏の構造

◇釧路集治監官署

標茶町郷土館として使われている釧路集治監官署は、明治19年12月に建設されました。今から128年前の事です。明治41年からは軍馬補充部川上支部事務室として使われ、昭和21年から標茶高校の校長室兼職員室として使われました。郷土館として塘路に解体移築されたのは、昭和44年です。なお釧路集治監、軍馬補充部、標茶高校時代にそれぞれ建物の間取りを変えており、現在の郷土館内の間取りは、軍馬補充部時代の間取りとなっています。

今回は「しべちゃ※しろくと」番外編として釧路集治監によって建設され、今も残る「官署(≒事務所)」と「文書庫」を紹介します。官署は現在標茶町郷土館として使われており、入ったことのある方も多いと思います。文書庫は標茶高校の正門横にある木造2階建ての建物で、標茶高校に通われた方ならもちろん、市街に住んでいる方は目にした事があるでしょう。この2つの建物の特徴と、その価値を紹介します。

標茶歴史遺産散歩道② 釧路集治監の建物



番外編

新しく登録されました！



平成17年までに町内では607種の植物が報告されています。その後、新たに見つかり、郷土館に標本が追加されたものを紹介します。

- 名前：ヒロハツリシユスラン（ラン科）
- 学名：Goodyera pendula Maxim. formabrachyphylla (F. Maek.) Masam. et Satomi
- 標本採取日：平成22年8月13日
- 採取場所：京都大学北海道研究林

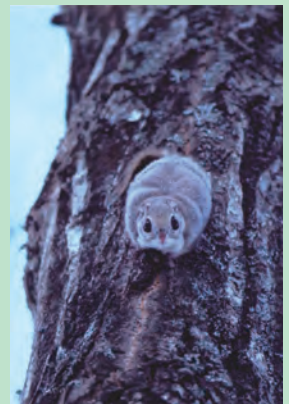
木の幹や岩に貼りついて生えるランです。「吊縞子蘭」の名前の通り、花は吊り下げられたように垂れ下がったあと、上に持ち上がる独特の形をしています。

これ、な〜んだ？ その8



冬の林を歩いていると、木の根元に米粒状のふんがたくさん落ちていました。この木の上をトイレとして使っていた様子。いったい何の動物のふんでしょう？

これはエゾモモンガのふん。このふんがあると近くにモモンガがすんでいることが分かります。エゾモモンガは年1～2回子育てをし、結婚シーズンは2月下旬から、1回目の子育ては4月中旬から始まるそうです。



◇ 釧路集治監文書庫



釧路集治監の文書庫
(日光から文書を保存する為か、窓が少ない。)

この建物の中で最も建築当初の様子が残されているのは、2階天井裏です。この天井裏はとても広いのが特徴で、床の面積は24坪、高さは1.8(4m)。民家の1階部分に匹敵する大きさがあります。それを可能にしているのが屋根を支えるトラス構造です。トラス構造とは現在橋げたなどに使われている建築工法で、西洋建築由来のトラス構造をこの建物に使い屋根を支えています。

現在でも天井を支えている木材は全て明治時代の木材で、ミズナラの一本材を荒く削り出して使っています。屋根材の一部には建築当時の請負者の名前が筆で書き残されており、当時を忍ぶ大切な証拠です。太いミズナラ材を贅沢に使い、当時では珍しいと考えられるトラス構造を建物に取り入れた事が、建築後何度となく大地震を受けても倒壊しない堅固な建物を生んだのでしょうか。

現在の標茶高校の正門横に立つあまり大きくない建物ですが、移築などは行われず建築当初のままに残されており、官署以上に当時の状態を留めている貴重な建物です。文書庫は115年前の明治32年に建築され、公文書を保管する書庫として使われました。その後、軍馬補充部時代には、消防器具庫として使われました。現在は、標茶高校の郷土資料室として使われています。この文庫室も小振りながら、良質のミズナラ材を使いトラス構造を取り入れた丈夫な建物です。ただ文庫室は標茶高校の施設の一つだった事もあり、歴史的な検証があまり行われていません。こうした経緯もあり、釧路管内でも価値ある有数の歴史的建造物ですが、文化財としては扱われていません。

道内の集治監施設は年月の経過とともに取り壊されており、現存している建物は非常に少なくなっています。本町に残る2棟の建物は集治監の存在を示す証人であり、後世に伝え残したい建物です。